

エルネスト・ラクラウの「対象 *a*」概念について ——「全体」を表す対象についての考察——

梅原宏司

1. はじめに

こんにち、政治において「ポピュリズム」の論議がきわめて盛んになっている。これは、2016年のイギリスEU脱退（ブレグジット）、アメリカ大統領選におけるトランプ候補の当選をどのようにとらえるかという問題意識による。日本でも、小泉純一郎首相や、橋下徹元大阪府知事・大阪市長の政治をどのようにとらえるかという問題意識によって、「ポピュリズム」論議が続いている。

そして「ポピュリズム」を取り上げるときに、多くの場合ついて回るのが「これまで十分に代表されてこなかった人々の主張・行動」あるいは「既成政党によって代表されてこなかった人々の主張・行動」という言葉である。すなわち、「既存の党派ではない、社会や国家全体を考えてくれる人」を求める人々の期待があり、その期待が「新しい」とみなされる対象（政治家・党派など）に集まることによって、こんにちのポピュリズムが出現してきたのである。

では、ある対象が人々の期待を集めるとはどういうことなのだろうか。そしてそもそも、ある文化や社会、さらに国家の「全体」を代表するという事は、どのような構造によるのだろうか。筆者がこの論文に取り組むのは、このような問題意識からである。

この問題を扱う際に、筆者はエルネスト・ラクラウの「対象 *a*」という概念を取り上げ、その分析を行い、その概念の限界と可能性を論じるというかたちをとる。その理由は、ラクラウが「ポピュリズム」の研究者・思想家として、ある政治集団の「全体」という問題を考える仕事を続けてきたからである。

本論文は以下のような構成をとる。まず、第2章において、ラクラウの仕事の概観を行う。つぎに第3章において、ラクラウの「対象 *a*」概念について考察する。第4章において、ラクラウの「対象 *a*」概念の限界を論じる。そして最後の第5章

において、「対象 a」という概念の可能性を論じるというものである。

2. エルネスト・ラクラウについて

エルネスト・ラクラウ（1935～2014）は、アルゼンチンに生まれた。青年時代は、ポピュリストの代表例として挙げられる、ファン・ドミンゴ・ペロンを支持する政治活動家として過ごす。しかし、ペロン派の内部抗争などによって、1969年にイギリスに亡命する。イギリスではアントニオ・グラムシ、ルイ・アルチュセール、ジャック・ラカンの影響を受けながら独自の理論を発展させ、また公私にわたるパートナーとなるシャンタル・ムフと出会い、共同作業を進めていく。

ラクラウとムフが著名になるのは、1985年の“*Hegemony and Socialist Strategy*”¹の刊行によってである。この書はグラムシの「ヘゲモニー」概念を、ラカンの概念を用いながら発展し、「ヘゲモニー」を新しい政治概念として提起したものであった。その後も「ヘゲモニー」をキーワードとして思索を続けていたが、2014年に死去した。「対象 a」概念も、ヘゲモニー概念の発展の上にあるものである。

ラクラウの仕事の先行研究としては、日本語では山本圭の『不審者のデモクラシー』岩波書店がある。しかしこの書においては「対象 a」概念はほとんど論じられていない。また、ラクラウの仕事を概観した日本語の書物自体がきわめて少ないのが現状である。

そこで、第3章では、ラクラウの「対象 a」概念について検討していく。まず、「対象 a」概念がどのようにして成立したのかを考察し、つぎにラクラウがそれをどのように用いているのかについて考えていきたい。

3. ラクラウの「対象 a」とは何か

3.1 ジャック・ラカンの「対象 a」という概念について

実は、「対象 a」という概念はラクラウが考えたものではない。これはフランスの精神分析家ジャック・ラカン（1901～1981）によって案出され、発展させられたものである²。そのため、まずラカンにおける対象 a という概念がどのようなものであるかを考えてみよう。

3.1.1 小文字の他者

対象 a は、フランス語では *objet petit a* と書く。ここで最後にある a とは何だろうか。これは「autre」である。つまり、「小文字の他者」(a は小文字) ということなのである³。

この「小文字の他者」とは、もともとは「主体」が、自分の姿を反映する他者（鏡、あるいは「私はあなたと同じ〇〇だ」と言いに来るような他者）と出会い、それによって「私は、それなのだ」という自己認識を得て形成する「自我」のことである⁴。この場合、最初の「主体」は、「私は自分がどのようなものであるかを知らない」という不安定な状態に置かれているが、鏡（のような他者）との出会いを経て「自我」を形成するのである。この場合、自我は最初の主体にとって別のもの（他者）であるため、 a と表記される⁵。

3.1.2 移行対象

一方で、ラカンは精神分析学における「対象関係論」を取り上げ、これを精密なものにするべく努力を重ねていた。この「対象関係論」とは、精神分析の自由連想法（ここでは、治療者が被治療者に、リラックスした状態で頭に浮かぶことを自由に話させる過程を指す）の際に、被治療者の語りの中にしつこく出てくるさまざまな対象をどのように考えるかという議論である。これは、カール・アブラハム以来「対象関係論」として名指されるようになり、どのようにこの対象を扱って治療に役立てるかという課題が論じられていた⁶。ラカンがこの対象関係論でもっとも関心を持ち、それを批判的に発展させたものが、ドナルド・ウィニコットの「移行対象」(transitional object) という概念である。ここでは、向井雅明の要約を借りよう。

彼（ウィニコット＝引用者注）は生後四カ月から一二カ月の子どもが毛布などの切れ端を終始手から離さないことに注目し、そこに特別の内容が含まれていることを見抜き、その意味を解明しようとする。彼の言葉を借りるとその切れ端は“指のおしゃぶりから熊のぬいぐるみ”の中間に位置するもので、子供が自分の指をしゃぶることをやめ、外の世界の対象物に興味を持ち始めるよう

になるまでの間、移行のための橋渡しをするものである。子どもにとってそれは指と同じように自分の体の一部とみなされるが、同時に、独立した外世界の対象物でもある⁷。

この対象物が「移行対象」と呼ばれる。この場合「移行」とは、子どもが母親などの外世界から、自らの境界を形成して（これは離乳などで表される）いく「移行過程」のことである。

この対象は一方で、「(母の=引用者注) 乳房のような何らかの部分対象を象徴している」⁸。つまり、生後間もない子どもは、母の乳房（これは哺乳瓶でもかまわない）から「自分」が分離していく過程（先に引用した「指のおしゃぶりから熊のぬいぐるみ」の過程である）で、「毛布などの切れ端」などの対象物を母の乳房の象徴とする。しかし、それは他方で、向井が要約しているように、自らの体の一部ともみなされるのである。そして、子どもが成長していき、「(子どもの=引用者注) 『内なる心的現実』と『ふたりの人（子どもと母親=引用者注）に共通して知覚されている共通世界』」がはっきりと確立し、子どもが外世界と自らの境界をはっきりさせると、この移行対象は意味を失うのである。

また、ウィニコットはこの移行対象が持つ意味について、以下のように述べている。

それは乳児にとって、暖かさを与えてくれたり、動き出しそうだったり、肌触りが良いように見えたり、あるいは、今にもそれが自らの生命力や現実をもつことを表すような何かをやりそうに見えたりする、といったものでなければならぬ⁹。

つまり、移行対象とは、自らの境界をまだ確立していない子どもが、暖かさや肌触りのよさなどの快を通じて、自己愛や自分の能力を投影できる対象なのである。

3.1.3 ラカンの対象 a

ラカンは、以上のようなウィニコットの「移行対象」概念から、自らの対象概念

「対象 *a*」を生み出すにいたった。その際に、ラカン自身の「小文字の他者」を指す *a* という文字がつけられた。

この対象 *a* とは、まず発達しつつあり、外世界との境界を形成しつつある「主体」にとって「他者」であるので、「*a*」の文字が用いられる。そしてまた対象 *a* とは、自己愛や自分の能力・欲望を引きつける対象であり、同時に主体の後ろから主体を欲望へと駆り立てる原因となる¹⁰。この意味で「小文字の他者」の特徴を残している。

ここでウィニコットの「移行対象」の特徴にラカンが付け加えたのは、「対象 *a*」の存在は、『移行対象』と違って、子どもの移行期に限らない」ということである。つまり子どもも大人も、自らの欲望を引きつけ、さらに欲望へと駆り立てる対象 *a* を持っているのである¹¹。

ラカンの対象 *a* は、ほかにも大変多様な意味づけをされているのだが、ここでひとまず説明を打ち切り、ラクラウの対象 *a* に関する議論をはじめてみたい。ラクラウは自らの対象 *a* 概念を、どのように構築したのだろうか。

3.2 ラクラウ個人の「対象 *a*」概念について

実は、ラクラウは対象 *a* 概念を採用する前に、「空虚なシニフィアン」という概念を使用し、それと対象 *a* を同じものとした。そしてラクラウは対象 *a* 概念を採用する際に、アメリカの批評家であるジョアン・コプチェクの「部分と全体」に関する議論を援用している。そのため、「空虚なシニフィアン」の議論の後にコプチェクの議論を検討し、最後にラクラウ自身の対象 *a* 概念を検討するという順番を取っていきたい。

3.2.1 ラクラウの「空虚なシニフィアン」概念について

ラクラウは、「社会」というまとまりが、政治的な争いによって常に自らを構成し続けることに失敗していると考え。それは以下のような理由による。

社会は、その束の間のシニフィエが政治的な争いの結果であるような、空虚なシニフィアンの語彙の総体を生み出す。社会が社会として自らを構成するこ

とこのように最終的な失敗——それは差異を差異として構成することの失敗と同じである——こそが、普遍的なものと個別的なものとの間の距離を架橋不可能に（する）¹²。

まず「空虚なシニフィアンの語彙」¹³とは、「人民（people）」、「自由」、「連帯（Solidarność）」¹⁴などの、抽象的な理念を表す記号である。ここで、たとえば「人民」とはどのような人々・政治的な主張を指すのかという争い（つまり、「人民」とはどのようなシニフィエを持つかという争い）が、「ヘゲモニー闘争」である。つまりヘゲモニーとは、普遍的だが抽象的な意味内容を持つ言葉の意味内容を決めてしまう争いなのである。

そして、ラクラウは普遍的なものと個別的なものとの関係を次のように説明する。人々にとって狭い地域の中で身近な問題（たとえば住宅問題）が、個別のものである請願（request）である。しかし、かりにその住宅問題がその地域のレベルで解決しない場合、その請願は他の請願（たとえば道路問題、上水道問題などなど）と結びついて、社会的要求（demand）を形成する（この複数の請願はそれぞれ同じ価値を持つので、ラクラウはこれを等価性（equivalential）な結びつきと呼ぶ¹⁵）。これが、「住宅問題は、政府が私たちのことを『人民』として認めていないからだ」あるいは「政府は私たちの『自由』をないがしろにしている」という要求に発展した場合、普遍的な空虚なシニフィアンとの結びつきが生じる。しかしこの普遍的なシニフィアンと個別の請願の結びつきは、請願が等価的に結びついている要求なので、きわめてもろい結びつきである。

そしてどの党派の要求が「人民」「自由」の意味内容（シニフィエ）を決定するかというヘゲモニー闘争が繰り広げられる。これがラクラウの言う「民主主義的な相互作用」なのである。

このように、「空虚なシニフィアン」とは、ラクラウにとってキー概念となるものである。そして、それをさらに整備しようとして、ラクラウはコプチェクの「部分と全体」の議論を援用するのである。それではつぎに、コプチェクの議論を見てみよう。

3.2.2 コプチェクの「部分と全体」

コプチェクは、「部分と全体」について考えるとき、精神分析の創始者ジグムント・フロイトとラカンが考えた「モノ」（ドイツ語で das Ding、英語で the Thing）の概念を検討することからはじめる。ラカンによれば、「モノ」¹⁶とは以下のような存在である。

「Ding」とは、「隣人 Nebenmensch」という経験の中で主体によって異質な本性のものとして、「異物 Fremde」として、初めから分離されてしまう要素です¹⁷。

フロイトの世界、つまり我々分析家の経験の世界が示していることは、再発見が問題になるのは、主体にとっての絶対の〈他者〉という意味での「das Ding」というこの対象である、ということです¹⁸。

クライン理論の本質は、「das Ding」という中心的な場に、神話的な母の身体を置いた、ということにあります¹⁹。

そしてラカンは、精神分析理論で常に問題になってきた「昇華」という概念を次のように定義する。「昇華は対象を〈もの〉という尊厳にまで引き上げるのです」²⁰。昇華という行為は、通常は性衝動とその心的エネルギーを、社会的・文化的により高い目標へ指すことを意味し、芸術活動などが昇華の典型として考えられてきた。ラカンはこの昇華のプロセスにおける「芸術と呼ばれている集団的な形成物と〈もの〉との関係、さらに昇華の次元での我々のふるまい方」²¹を理解しようとして、「モノ」という概念を導入したのである。

コプチェクはこのラカンの昇華の概念を援用しながら、ジル・ドゥルーズのクローズアップの考察を援用して、つぎのように主張する。

クローズアップは、あるシーンの一部に近づいて見たものではない、とドゥルーズは主張する。つまりクローズアップが表しているのは、そのシーンの一要素として数えられる対象ではなく、ある[・][・][・][・]ディテールが全体から引き抜かれて、注目を集めるために引き伸ばされるのではない。むしろここで現れ出るの

な全体性の受肉となることである²⁶。

このラクラウの主張を詳細に検討してみよう。

まず、ラクラウは対象 a を、不可能な全体を具現化する部分対象だという。この「不可能な全体」とはいったい何なのか。ここで、ラクラウが当初採用していた「空虚なシニフィアン」たる抽象的な理念の機能を思い出すのが役に立つだろう。空虚なシニフィアンは、その中に具体的な内容を入れられることで、具体的な政治的役割を果たす。しかし、この普遍的なシニフィアンは個別の請願が結びつくことによって成り立っている。そして、請願は等価的に結びつくし、新しい請願が次々に結びつくと、空虚なシニフィアンが示す範囲というのはきわめてあいまいになる。そのため、最初から「閉じた全体」という範囲は示せないものなのである。ラクラウは、このように示すことができない全体性を「不可能な全体」と呼ぶのである。

さらに「モノ」の問題を合わせて考えてみよう。「モノ」とは、ラカンやコブチェクにとって、神話的な母親の身体であり、崇高なものである。それに対して、対象 a 自体は、元来は「ふつう」のものであり、特に崇高ではない。しかし、情動 (affect) が備給されることによって、たんなる「部分」としてしか見られなかった対象 a は、崇高な「モノ」の代理となる。これは、ウィニコットが「移行対象」について言っていた「独立した外世界 (母親の身体など) 全体を表すもの」ということである。

ではラクラウは「空虚なシニフィアン」に加えて、なぜ対象 a という概念を導入したのだろうか。ラクラウはそれについて明言していないのだが、おそらくは「部分が全体の具現化となる」という要素を強調したかったためだと考えられる。

3.2.4 具体例——2016年アメリカ大統領選で起こったこと

ここで、具体的に「ポピュリズム」の例を出して考えてみよう。それは2016年のアメリカ大統領選挙における現象である。当初ドナルド・トランプは、ただの泡沫候補であり、「お笑い」的な人物に過ぎなかった。つまり、「その他大勢の候補」という部分に過ぎなかったのである。しかし彼は、貧困に苦しむ白人の支持を集め

ることに成功し、あつという間に共和党の候補となり、本選でも大半の予想を覆して当選した²⁷。

ここで起こったことは何なのだろうか。まずトランプは、貧困に苦しむ白人の希望を集めることに成功した（情動の備給に成功した）。それは、貧困に苦しむ白人の個別の困難をつなぎ合わせ、「エスニック・マイノリティではなく、私たち白人こそが、抑圧に苦しむアメリカの人民（people）である」という主張にしまったということである。ここで、「白人こそがアメリカの人民である」という論理が成立してしまったのだ（言い換えれば、「人民」という空虚なシニフィアンが、「白人」というシニフィエを指すことになったのである）。そもそも「白人」のみが全体性を含む「人民」であるということは不可能なことであるが、トランプはその不可能な全体を構築したのである²⁸。

さらに、トランプは「人民たる白人」の希望を具現化した存在として行動した。ここでトランプは、「不可能な全体性」（「人民」）が「受肉した存在」となったのである。

つまり、ドナルド・トランプは、貧困に苦しむ白人の対象 *a* となり、当選するにいたったのである。

4. ラクラウの「対象 *a*」概念の限界と可能性

さて、ここまでラクラウの対象 *a* 概念を検討してきた。ここからは、ラクラウの対象 *a* 概念に含まれる限界と可能性について考えてみたい。

4.1 限界——「剰余享楽」という問題の欠如

ラクラウの対象 *a* 概念の限界の最大のもの、3.1.3 でラカンの対象 *a* の特性として示した「自らの欲望を引きつけ、さらに欲望へと駆り立てる」という面を軽視していることである。

実は、ラカン自身は、対象 *a* 概念を発展させる過程で、「剰余享楽」という意味を付与していた。これはカール・マルクスの「剰余価値」から援用されたものである。

主体は対象 *a* によって、自らの欲望を引きつけ、さらに欲望へと駆り立てられるので、対象 *a* を追い求めてやまない。この過程で「享楽」が生じる。ラカン的な

「享楽」とは、「単に身体的、肉体的な快のみならず、誰かに残酷にあたったり、罰を与えたり、困らせたり」することを含む²⁹。対象 a を追い求めていく過程において、このような享楽がさらに主体を駆り立てていくのである。そして主体は、何が目的かもわからずに、対象 a をさらに追い求めていくのである。

これは3.24で取り上げたトランプ大統領の例にもあてはまる。トランプが「America, first!」と叫ぶたびに、支持者はそれに情動をかきたてられながら、さらにトランプの言動に没入していき、自身の人種差別的な言動を正当化して実行し続ける。これが剰余享楽の実例である。

しかし、ラクラウは、実は対象 a を論じる際に「享楽」という言葉をまったく使っていない。このことは数多くの論者によって欠陥として指摘されてきた³⁰。この問題は、ポピュリズムを考える上で、なお課題として残るであろう。

4.2 可能性——「希望」という情動と「代表」の関係

ラクラウの対象 a 概念は、このように限界もあるが、応用の可能性も大きいと筆者は考えている。

まず、筆者は文化デザイン学科のプロデュース系に属しているが、プロデュースの問題として、対象 a 概念はきわめて有効であると考えている。ある文化の対象（アイドルなどの芸能人や作品など）が、どのような「全体」（支持者）の情動を具現化しているのかという問題を考える際に、対象 a 概念は有効であると考えられる。

また、筆者は文化政策の研究者であるが、文化政策を考える上でも対象 a 概念は有効であると考えられる。たとえば、何を「文化遺産」として保存すべきかというヘゲモニー闘争を考えるときに有効であろう。

一例を挙げれば、原爆ドームの保存問題がある。原爆ドームは、1966年に公式に広島市議会で保存決議がなされるまで、放っておかれた。これは保存と解体をめぐる論争があり、原爆ドームが「平和のシンボル」として決定するまでさまざまな紆余曲折があったからである³¹。これは、原爆ドームが最終的に「日本の・世界の平和」という不可能な全体を具現化する対象 a として決定したと解釈できる。

そして、対象 a はナショナリズムを分析する際にも有用である。対象 a は、「国

民」「民族」という本来不可能な全体を、たやすく成立させてしまうものである。あるナショナリズムを成立させる対象 *a* が何か、それを分析することは、その時点でのナショナリズムがどのようなものであるかをかなり明らかにしてくれる。

さらに、対象 *a* 概念は、希望という情動を考える上できわめて重要である。通常「希望」とは、「広く世界の万人が幸せになる」というニュアンスを暗黙の裡に前提として用いられやすい。しかし、他者を排除して、自分たちだけのユートピアを築きたいという「希望」も存在するのである。本論文で取り上げたトランプは、そのような希望によって成り立っているし、古くはナチス・ドイツもそうした存在として考えられる³²。

このように、対象 *a* 概念は、さまざまなナショナリズムや文化などの現象が、いかに「全体」として成立しているかということ解析するうえできわめて有効だと筆者は考えている。

¹ 現在手に入りやすい翻訳は、エルネスト・ラクラウ、シャンタル・ムフ『民主主義の革命——ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』筑摩書房、西永亮・千葉真訳が挙げられる。

² ジャック・ラカンの仕事について考察するには独特の困難さがつきまとう。まず、ラカンの講義録『セミネール』がまだ全巻刊行されていないという事実がある。有名な論文集『エクリ』は彼の仕事の中期までしかカバーしていない。また、ラカンはある概念や定式をたえず発展させていったため、概念や定式の内容が毎年のように更新されてしまう。そのため、ある概念や定式について、まとまった記述を行うのが大変難しいのである。「対象 *a*」についても例外ではない。そのため、本論文ではラカン自身の文章からの引用があまりなく、ラカンの「対象 *a*」概念について他の研究者がまとめた記述に大幅に頼ってしまうことをご了承いただきたい。

³ *a* をイタリックで書く理由については、本論文では割愛する。ブルース・フィンク『後期ラカン入門』人文書院、村上靖彦監訳、小倉拓也・塩飽耕規・渋谷亮訳の 124 頁をご参照いただきたい。

⁴ 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社、206 頁。

⁵ 「大文字の他者」も存在するが、本論文では論じることができない（その必要もない）。

くわしくは、たとえば新宮一成『ラカンの精神分析』講談社をご参照いただきたい。

- 6 新宮一成『ラカンの精神分析』講談社、88頁。
- 7 向井雅明『ラカン入門』筑摩書房、323-324頁。
- 8 ドナルド・ウィニコット『改訳 遊ぶことと現実』岩崎学術出版社、橋本雅雄・大矢泰士訳、7頁。
- 9 ドナルド・ウィニコット『改訳 遊ぶことと現実』岩崎学術出版社、橋本雅雄・大矢泰士訳、7頁。
- 10 向井雅明『ラカン入門』筑摩書房、327頁。
- 11 ラカンが当初『エクリ』で挙げた対象 a の代表例は4種類ある。それは糞便、乳房、まなざし、声であり、多くの解説書にもそう書かれている。しかし、ラカンはのちに述べる「剰余享樂」の概念の導入とともに、対象 a をこの4種類に限ることをやめてしまう。こうした問題についても、他日の考察を期したい。
- 12 エルネスト・ラクラウ「普遍主義、個別主義、そしてアイデンティティの問い」『現代思想』青土社、1996年12月号、布施哲訳、270頁。
- 13 シニフィアンとシニフィエとは、スイスの言語学者ソシュールの考案した概念であり、ラカンなど数々の人々によって発展させられたものである。ラクラウがこの概念を使う場合、シニフィアンは「意味するもの（記号）」であり、シニフィエは「意味されるもの（記号の内容、意味内容）」である。
- 14 ソリダルノスチと日本語表記される。1980年に社会主義政権下のポーランドで成立した自主管理労組「連帯」のことをさしている。自主管理労組「連帯」は、ポーランドの政権と政治的な争いを繰り広げた結果、それ自体は何でも示しうる「連帯」（通常なら「人々が結びつく」という程度のシニフィエを持つ）というシニフィアンのシニフィエを、自主管理労組「連帯」とすることに成功した（つまり「連帯」という言葉を発すれば、すなわち自主管理労組のことを指すようにした）。これはラクラウがその著作でよく引き合いに出す例である。そしてこの場合、「自主管理労組『連帯』は、政権とのヘゲモニー争いに勝利した」ということになる。
- 15 Ernesto Laclau, "On Populist Reason" Verso, 2005, p73.
- 16 3.1.3で述べた通り、この「モノ」とは、母親の身体を意味する。また、以後「モノ」という表記と〈もの〉という表記が併存することがあるが、これは引用元の表記をそのまま

採用した結果である。つまり、本論文では「モノ」とくもの>は同じ「das Ding」のことである。

- ¹⁷ ジャック・ラカン『精神分析の倫理（上）』岩波書店、小出浩之・鈴木國文・保科正章・菅原誠一訳、76頁。
- ¹⁸ ジャック・ラカン『精神分析の倫理（上）』岩波書店、小出浩之・鈴木國文・保科正章・菅原誠一訳、77頁。
- ¹⁹ ジャック・ラカン『精神分析の倫理（上）』岩波書店、小出浩之・鈴木國文・保科正章・菅原誠一訳、158頁。メラニー・クラインはイギリスの精神分析家であり、ウィニコットやラカンに多大な影響を及ぼした。ここで「クライン理論の本質」と言われる内容に、「神話的な」という形容詞を除いて、ラカンは反対していない。
- ²⁰ ジャック・ラカン『精神分析の倫理（上）』岩波書店、小出浩之・鈴木國文・保科正章・菅原誠一訳、167頁。
- ²¹ ジャック・ラカン『精神分析の倫理（上）』岩波書店、小出浩之・鈴木國文・保科正章・菅原誠一訳、168頁。
- ²² ジョアン・コブチェク『<女>なんていないと想像してごらん』河出書房新社、鈴木英明・中山徹・村山敏勝訳、82-83頁。傍点は原文通り。
- ²³ ジョアン・コブチェク『<女>なんていないと想像してごらん』河出書房新社、鈴木英明・中山徹・村山敏勝訳、83頁。
- ²⁴ Ernesto Laclau, “*On Populist Reason*” Verso, 2005, p113. 傍点は原文ではイタリック。
- ²⁵ Ernesto Laclau, “*On Populist Reason*” Verso, 2005, p115.
- ²⁶ Ernesto Laclau, “*The Rhetorical Foundations of Society*” Verso, 2014, p120.
- ²⁷ ここでは、トランプの当選がアメリカの選挙人制度を巧妙に利用した戦略に基づくものであり、対立候補のヒラリー・クリントンより得票が少なかったという問題は考えない。それよりは、まったく当選の可能性がないと考えられていたトランプが当選してしまったということの問題としたい。
- ²⁸ ラクハウは「人民」という概念を、最大の「空虚なシニフィアン」「不可能な全体」として考える。この「人民」という不可能な全体を構築し、それを基盤とする政治党派・政治家が「ポピュリズム」なのである。Ernesto Laclau, “*On Populist Reason*” Verso, 2005, p162を参照のこと。

- ²⁹ ブルース・フィンク『ラカン派精神分析入門』誠信書房、中西之信・椿田貴史・舟木徹男・信友建志訳、322頁。
- ³⁰ この批判の典型として、ヤニス・スタヴラカキス『ラカニアン・レフト』岩波書店、山本圭・松本卓也訳の第2章「ラカンとともにラクラウを——享楽について：言説の情動的限界を交渉すること」が挙げられる。
- ³¹ この問題については、濱田武士「戦争遺産の保存——原爆ドームを事例として——」『関西学院大学社会学部紀要』第116号が詳細に検討を行っている。濱田は、宗教学者ミルチャ・エリアーデの「中心のシンボリズム」という概念をキーとして用いているが、これは対象 *a* 概念と接点があるとも考えられる。こうした概念的考察も他日に期したい。
- ³² ナチス・ドイツを、ゆがんだ「ユートピア的希望」の産物として考察した書物に、エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』水声社、池田浩士訳がある。ブロッホはドイツの哲学者で、「ユートピア」や「希望」といった情動を人間の駆動力と考え、それがいかに現れるかということを生涯考察し続けた。ブロッホの「希望」概念は、対象 *a* 概念と近接するところがある（また、上に挙げたエリアーデの「中心のシンボリズム」とも近接する）ため、他日考察したいと考えている。